高知県立坂本龍馬記念館だより　2014（平成26）年7月　第90号

高知県立坂本龍馬記念館　The Sakamoto Ryoma Memorial Museum

龍馬（ひとう）

海援隊旗（二曳きの旗）

http://www.ryoma-kinenkan.jp

明鏡止水 MEIKYO SISUI

新発見の龍馬の手紙その波紋と今後

龍馬の大政奉還論を考えていく上で欠かせない資料

慶応３年 11月後藤象二郎宛て龍馬書簡（草稿）

今年度早々の4月7日、新発見の手紙の報道が全国を駆け巡った。大政奉還直後の手紙で超一級品の資料が、これまで研究者にも知られていなかったことに驚いた。しかも、それがNHKの番組で、芸人の方が道行く人にインタビューしたことをきっかけに見つかったとは、信じられない話だった。

発見の経緯

今年の2月13日、NHKの「突撃！アッとホーム」という番組のディレクターから、龍馬の手紙を見てほしいという電話があった。15日にメールで送られてきた写真を一見して驚いた。いかにも龍馬らしい文字だった。そして、内容を読んで再び驚いた。これまで確認されていない内容の手紙で、しかも本人でないと書けないような内容である。この内容で偽筆はあり得ない。

その後、実際に館に持ってきていただいて拝見する時には、箱を開ける手が思わず震えてしまった。

その後の様子や手紙の内容は同番組や同局の「歴史秘話ヒストリア」でご覧いただいた通りである。非常に重要な内容で、今後龍馬の大政奉還論を考えていく上で欠かせない資料となる。

展示の反響は？

この手紙は、所蔵者の方のご厚意で、当館へ寄託（所有は個人のままで、管理を博物館に任せること）が決まり、早速、4月18日から6月1日まで特別展示を行い、多くの方にご覧いただいた。

これまで、この手紙と同等の重要性を持つ資料の発見は何度かあったが、これほど大きな反響があったことはなかった。展示期間中、ほぼ毎日問い合わせの電話が何件もかかってきており、NHKの影響力の大きさを痛感したことだった。

今年のゴールデンウィークは曜日の配列の悪さや消費税の上昇、高速のETC割引の改訂、ガソリン価格の高騰など悪条件が重なり、入館者が昨年より減少した。しかし、月単位で見ると、5月は昨年を上回っており、「龍馬伝」の年と、その翌年は別格として、その次に多い歴代3位の20、449人だった。昨年もまだまだ「龍馬伝」の余波が続いており、今年はもう続かないだろうと思っていたところで、この手紙の出現でまた入館者数が右肩上がりとなった。

しかも、3年後には龍馬暗殺や大政奉還から150年という節目の年を迎えることになる。今から展示について考え始めていたところで、こんな中心になる資料の出現である。所蔵者の方が「この手紙が世の中に出たがっていたのかもしれない」とおっしゃっていたが、当館にとっては本当に救世主のような手紙である。

手紙の今後

貴重な資料なだけに、常時展示することはできない。年間2～3ヶ月程度、時期を見て展示をすることになる。今年は、この後8月9日(土)から16日(土)までのお盆時期に当館で展示する。それ以後は、他館への貸し出しについて、現在検討中である。

三浦　夏樹

熱心に見入る来館者

企画展「風刺画にみる幕末社会」展

庶民ならではの観点で見直す錦絵

浮世絵のなかでも多色刷りの版画を指す「錦絵」には、役者や花魁、芝居の一場面、風景などが色彩豊かに描かれ、江戸の庶民にとっては身近な娯楽であった。なかでも、幕末期に流行した「風刺画」と呼ばれるジャンルの錦絵には、動揺する社会のありさまが庶民の視点から、ややひねったかたちで描かれている。ちょっとしたクイズ感覚で読み解く風刺画は、庶民の間で大いに人気を博し、戊辰戦争期には爆発的に広まったとされる。

各藩や人物をあらわす〝暗号〟

風刺画の構図はさまざまであるが、戊辰戦争期のもので特徴的なのは、子供同士の遊びやけんかに見立てて、新政府と幕府の対立を描くものである。よく見ると、大名の姓や家紋、城下町の名、名産品、それらにひっかけた駄洒落が、絵や文字として人物の着物の柄や台詞などに隠されている。公然と幕府や幕政にたいする批判をおこなったり、そうした世情を風刺した出版物を発行することはもちろん御法度である。それでも、少しでも錦絵を多く売りたい出版元と、先行き不透明な政情を案じつつも、素直にこうした絵を楽しみたいという庶民の思惑が一致した結果が、このような現象となってあらわれたのではないだろうか。

戊辰戦争期の風刺画「子供遊び夏の栄」。右側が幕府軍、左側が新政府軍。

各藩や人物をあらわす〝暗号〟は、たとえばこのような感じである。薩摩はサツマイモの「芋」、島津家の家紋「轡」（○に十）、籠目と縞模様で「カゴ」「シマ」。長州なら「萩」（城下町）や長州の「長」にかけて「蝶」や「帳（面）」。土佐は「鰹節」や山内家の家紋「三つ葉柏」。徳川慶喜は一橋の「橋」にちなんだ「梯子模様」、桑名藩は有名な地口「その手は食わな（桑名）の焼き蛤」から「蛤」等々である。江戸の庶民は参勤でやってくる大名行列や武鑑（大名家の国元や石高、藩主の位階などを記した書物）などによって、大名家の紋などもよく知っていた。また、江戸は消費都市であるため、各地の産物にも明るかったと思われる。刻々と移り変わる戊辰戦争の戦況も、瓦版や町触などでおおよそは把握していたであろう。江戸の庶民にとって、こうした暗号を読み解くのは比較的容易であったかもしれないが、現代の私たちには少々難しい。

では、産物に関する問題をひとつ。「芋」は「薩摩」、「鰹節」は「土佐」、では「ろうそく」が指すのはどこの藩？答えは展示のなかから探し出していただきたい。

ろうそく柄の着物の子供。さてどこの藩？

見えてくる歴史の一側面

こうした風刺画から見えてくるのは、当時の庶民が庶民の立場から目にした、通史には現れない歴史の一側面である。戊辰戦争において新政府軍と幕府軍のどちらに味方するか、各藩では藩論を二分し、結果多くが新政府軍に従った。しかしどの藩がいつ新政府軍に従ったか、あるいは抵抗したものの降伏したかについては、情報伝達の時間差や希望的観測などが影響し、史実と庶民の観点でズレが生じる場合がある。将軍のお膝元である江戸で出版される風刺画には、自然幕府びいきの心情が絵に現れることもある。

2人の女性は天璋院（てんしょういん）（右）と和宮（かずのみや）（左）。着物は実家の紋である「轡（くつわ）」と「菊」模様。

今回の展示では、現代人でも風刺画の絵解きができるよう、着物の柄に隠された〝暗号〟にも詳細な解説を付す予定である。江戸の庶民ならではの観点で幕末という時代を見直していただくとともに、色鮮やかな錦絵のかずかずをお楽しみいただきたい。

亀尾　美香

平和を考え、語り、実践するために

オペラリサイタルから『平和の炎賞』受賞まで

「ブラボー」の声とアンコール

4月13日、「示野由佳&ディーター・パッシング オペラリサイタル」当日は雨だった。それにもかかわらず県立県民文化ホールは1，000人の熱気に包まれていた。第1部でオペラ、第2部ではオリジナル歌曲『お龍と龍馬』が披露された。

『平和の炎賞』像をハプスブルク理事長から受け取る森館長

示野さんの貫録とパッシングさんの軽やかさがうまくマッチした舞台は素晴らしかった。ウィーンの歴史と音楽の楽しみ、何より『お龍と龍馬』が持つ愛と平和のメッセージが会場に染み込んでいくさまが感じられた。

「平和への思いが伝わりました」「歌の時間が短く感じた。もっと聞きたかった」「最高のオペラでした。外人の龍馬が日本語で歌ったことも素晴らしい」「手作りの企画がよかった」「感動で涙が出ました。このプロジェクトプログラムが日本中を沸かせてくれると信じています」「よかった！全国へ、世界へ」等々。

聴衆もコンサートをより熱いものにしてくれた。「ブラボー」のかけ声と鳴り止まない拍手。皆さんが音楽を楽しんでくださった証しである。

マイクを持ち、あいさつするハプスブルク理事長

オーストリア・ハプスブルク家より『平和の炎賞』受賞

そんなリサイタルから1か月後の5月15日。オーストリア・ウィーンも雨だった。

この日、森健志郎館長は、坂本龍馬に代わって『平和の炎賞』を授与された。傍らには郷士坂本家9代目坂本登さんもいる。日本からは坂本龍馬財団の方など総勢16人が参加した。

ハプスブルク家、日本大使館ら120人を超える日独の関係者。会場には絵画や立体など様々な芸術作品が並び、民族衣装を着たダンスショーや、示野由佳さんとパッシングさんによる『お龍と龍馬』などの披露もあり、会場は熱気に包まれた。

遡れば、リサイタル開催準備の最中。ウィーンの平和団体「平和の炎」から坂本龍馬に『平和の炎賞』を授与したいという話が持ち上がった。示野さんが理事長であるヘアタ・マルガレーテ・ハプスブルクさんに『お龍と龍馬』や坂本龍馬をご紹介くださったのだ。その功で、示野さんも『平和の炎賞』を同時授与された。

700年の歴史と伝統を持つハプスブルク家からの平和賞授賞は大変名誉であると同時に、坂本龍馬という人がヨーロッパで評価された意義は大きい。

渡航前、尾崎正直・県知事に報告すると「高知とオーストリア、しかも龍馬とハプスブルク家がつながるとは素晴らしい。ぜひ友好の絆を深めてほしい」と、急きょ原哲・文化生活部副部長が参加された。在オーストリア日本大使館で竹歳誠・特命大使と話をしたときも、龍馬からカツオのたたきまで話は広がった。

日本からの参加者たち＝ウィーン市内のヨハン・シュトラウス像前で

私の耳に今も残るのは、「平和の炎賞は、受賞者が平和と喜びを持って日々活動し、信頼と安心を輝かせ、あらゆることに不屈であることに勇気と力を与えてくれるでしょう」「友好があるところには自由があり、自由があるところには平和があります」というハプスブルク理事長の凛とした声だ。

今回受賞した『平和の炎賞』像は小さな炎であるが、9月にはハプスブルク理事長ご夫妻が来高。記念館に2メートルという大きな炎、『平和の炎碑』の寄贈・建立が予定されている。

前田　由紀枝

観光地の中にある博物館として

リニューアル構想　見えてきた“分館”構想

リニューアル基本構想検討委員会は６月に開かれた第５回を以て終了した。この半年間で基本構想はまとまったので、これからは基本設計を行い、必要な予算を獲得する段階に入る。

館西隣りの新館予定地

当館は開館当初、展示資料が少なく、博物館というより観光施設として認識されることの方が多かった。しかし、私たちが目指してきたのは、博物館としての活動で、安心して収集・保管・展示できる環境を追い求めてきた。龍馬の資料は、５００年後も１０００年後へも伝える必要があり、完璧な博物館としての態勢を整えなければならない。

しかし同時に、観光名所である桂浜公園内に立地していることも事実なので、観光地の一つとして捉えられることも無理のないことである。実際、歴史に詳しくない観光客の方も多く訪れる。

博物館では、すべての来館者の要求を満たすというのは、非常に難しい。理想としてはそれを考えつつ、実際にはある程度対象を絞ることが多い。当館であれば、龍馬ファンと歴史愛好家、一般観光客の求めるものや理解度は違う。そして、年齢によっても理解度は違うので、子どもでも理解できる展示か、大人を対象とした展示かで随分変わってくる。

また、昨今では、ＮＨＫ大河ドラマ『龍馬伝』の影響もあり、韓国や中国・台湾の方々の来館もある。さらに今年は、オーストリアのウィーンで、ハプスブルク家から龍馬に対して「平和の炎賞」も授与された（３面参照）。龍馬が世界的に認知され始めているので、英語の表記は勿論、韓国語や中国語の解説なども念頭に置かなければならないだろう。

今回のリニューアル構想では難しいことを承知で、これらすべての要求に応えられる展示を目指していく。新しく造る別館では資料を並べて、歴史を深く知ることができる館に。既存館の方は映像や模型やパネルによって簡単に楽しく理解できる館を目指す。そして、資料を安全に保管でき、多くの方から研究に利用してもらえる館を目指していく。

基本構想検討委員会が終わって、様々な課題が見えてきた。完璧な設備を持った新館建設は当然として、新館と既存館の接続の問題や塩害対策、既存館の活用方法など、解決すべき問題は山積みだ。今後はこれらの課題を解決した上で、基本設計に盛り込んでいく。

新館の開館予定は、２０１７年11月15日。この日は丁度、龍馬暗殺１５０年にも当たる。残り３年半しかないが、全力を挙げて取り組んでいきたい。

三浦　夏樹

学芸員の視点　学芸員の仕事

博物館の「学芸員」といえば、一般的には専門的研究者をイメージされると思う。しかし、現実は違っている。〝なんでも屋〟的色彩が濃い。研究調査から始まってリファレンスサービス、つまり様々な問い合わせへの回答。館内をはじめとする解説、これは美術館などではギャラリートークと言われるが、当館ではあくまで解説である。資料収集管理、接客はもちろんのこと、講演、講座、企画展の開催も年間途切れることはない。

また龍馬スピリットの発信をうたう記念館では、各種イベントも必須である。

私もそういった学芸員の仕事に就いて10年を経た。かつては10年ひと昔と言ったが、今や数年数カ月単位で時代は動いている。記念館での10年を見ても大きなところでは指定管理者公募、20周年記念事業、いまや念願の新館建設が具体化してきた。

館のハード面は新館構想によって方向性が見えてきた。では、ソフト面でこれから〝龍馬〟がめざすべき先はどこか。

ひとつには人材育成がある。実践は進んでいる。一昨年、小学校社会科の全国研究大会が高知で開催された。その発表校となった高知市立昭和小学校の６年生は龍馬の授業を公開した。先生方と夜遅くまで教材研究、授業研究した日々も懐かしい。授業では「船中八策」「海援隊約規」が原文のまま教材として使われた。

また昨年には、〝龍馬の生まれた町〟が校区にある、同市立第四小学校６年生も社会科教育の県大会で授業発表した。まさに世界にたったひとつ、龍馬の生まれた町の学校である。彼らは卒業式で「私たちは未来の龍馬になる」と誓った。

昨年８月15日からは、記念館主催で毎年開催する「夏休み子ども・龍馬フォーラム」が始まった。全国から20人の小中学生が集まり、その活発な発言には目を見張るものがあった。

子どもたちは龍馬を学ぶことによって、自分自身の生き方や今という時代を考え行動していく。龍馬学習とは、自分自身を成長させ可能性を広げる過程であろう。龍馬を学ぶ子どもたちを育てることもまた、重要な学芸員の仕事だと思う。

前田　由紀枝

龍馬学習の成果である板書 =2012年 11月、高知市昭和小学校で

終戦記念日に誓う!　第2回　夏休み子ども・龍馬フォーラムに向けて

今年のテーマは 家族と友達

昨年のフォーラムの様子。龍馬が好きな者同士、友達の発表を聞く表情も真剣に。

◆～龍馬になる一日～

昨年、大盛況に終わった「夏休み子ども・龍馬フォーラム」。今年も8月15日に第2回が開催される。東は栃木、東京、静岡、西は京都、大阪、兵庫、高知など、学年も小学2年生から高校1年生までと幅を広げた。我こそはという龍馬好きの子どもたちが全国から集まるフォーラムだ。

龍馬がつくりたかった世の中についてあなたはどう思いますか？あなたにとっての家族とは？仲間とは？当日子ども達には龍馬に思いを重ねながら、色々な思いや考えを語ってもらう。さて、現代社会が抱える問題、戦争や平和、夢や希望、どんな意見が飛び交うのか、事前アンケートを読みながら、当日を心待ちにしている今日この頃である。

◆パネリストは小学2年生から高校1年生まで総勢18名

昨年夏から今年春の間に龍馬記念館を訪れ「拝啓龍馬殿」にメッセージを残してくれた子どもたちからは9名を選出。最年少の小学2年女子は高知の子。力強い字で「りょうまさんのことをもっとしっていちにんまえの女子になりたいです」と綴っていた。東京の中学2年男子は名前が「龍馬」君。「日本を変えるような人になって欲しいと言われるけど、正直…重いです」と綴っている。最年長は京都の高校1年男子。龍馬の好きな所は「思ったことをすぐ行動に移す行動力と、武力を使わずに人々をまとめあげる統率力、大事な所で正しい判断をする決断力」とのこと。今年3月、館長から「子どもフォーラムに出てもらえませんか」という連絡をさせていただくと、保護者の方も龍馬ファンの方が多く、皆さん参加を快諾してくださった。

高知県内からは、4校から9名が参加する。第四小学校は校区内に龍馬の生誕地があり、校庭には「りょうまの木」がある。校歌の歌詞にも「坂本龍馬」が入っているまさに龍馬ずくめの学校。4名の参加児童による校歌の披露からフォーラムがスタートする。地元からは浦戸小学校の児童2名が参加。放課後に記念館に勉強に来る熱心な児童もいる学校だ。愛宕中学校からは、以前に館長の講演を聞いて熱い感想文を送ってくれた生徒2名が参加。高知県北部の嶺北中学校からも1名参加予定。

◆～現代は「平和」？～

終戦から今年で69年―。戦争を知らない世代が増え、戦争を身近に感じたり危機感を持つことが難しくなってきている。このフォーラムで最初に問いかける質問は「今の世の中は平和だと思いますか？」。昨年の答えはＹＥＳがわずか5人、ＮＯが圧倒的に多かった。ＹＥＳの理由は「今、日本は戦争をしていないから」。ＮＯの理由は「世界のどこかで戦争があるから」「飢餓で苦しんでいる人がいるから」。さて今年の答えは？

この一年、世界中で平和を揺るがす様々な出来事が起こった。きっと昨年と同じ質問に対しても様々な回答を聞けることと期待している。また、こちらのフォーラムは一般の方も聴講可能。これからの世を担う子どもたちからどんな発言が飛び出すか、どうぞお楽しみに。

尾﨑　由紀
西本　有里

拝啓 龍馬殿

平成26年3月21日～6月20日

118通

龍馬殿　貴殿は四国のほこりぜよ！
（3月21日　愛媛　N・K　68歳　男性）

自分は今、就職前の最後の旅行としてこの四国へ来ています。私は結局自分がなろうとしていた。ものに何一つなれませんでした。加えてこの仕事はもう県外へ出ることはできません。少しは気晴らしになるかと思って旅に出ましたが、心は暗くなるばかりでした。ですが、貴方の人生を知って少しだけ和らぎました。28で脱藩し、33で人生の幕を閉じるまでどれだけの知己を得て、どれだけの事を成したかを考えると、23歳で人生が終わった気になっていた自分が恥ずかしくなった。明日の道後温泉でこの旅は終わりです。ですが、きっと私の人生はここからだと思います。むこう一年は頑張ってみます。そして、それでもまだかつて自分が憧れたものになりたければ、私はそれに何があってもなろうと思います。それができたら私は必ず貴方にお礼を言いにここへ来ます。この度は有難うございました。
（3月21日　静岡　S・K　23歳　男性）

私の娘の誕生日は11月15日です。「坂本龍馬と同じ誕生日だ！」と家族みんなで喜びました。赤ちゃんの頃は本当によく泣く子でしたが、だんだんと落ち着きのある気の強い子に成長しています。どんな大人になるのか楽しみです。
（3月22日　愛知　M・A　34歳　女性）

坂本龍馬記念館から雄大な太平洋を見ながら四国の英雄龍馬の写真や実績を見て今更ながら心が晴々しました。米寿のお祝いに、息子夫婦に心から感謝しています。
（4月16日　香川　H・A　88歳　男性）

私は現在、兄と共に鉄工所を営み、経済の荒波にも負けず日々精進と努力を重ね、お互いをはげまし、小さいながらですが経営を続けています。混迷する世の中で私だけではなく他の者を幸せにしていきたい想いはあるのですが、上手くいかない事も多く、悩む日々です。私の身近にあなた様がいらっしゃれば一言でも助言をいただきたいものです。
（4月19日　兵庫　K　36歳　男性）

四度目の来館です。シェイクハンド像はじめてみました。しっかり握手しました。あなたに恋して30年になります。あなたの歩いた道を歩きたくて日本中旅しています。目の前に太平洋が見えています。青くてきれいです。また来ます。
（4月26日　C・K　62歳　女性）

私は土佐人でありながら、貴方があまり好きではありません。今の日本を見てあなたのしたい事が本当に良かったのだろうかと思うからです。世界に開かれた日本、そんな日本の姿、今もそうは思えないの。あなたが亡くなった後、したかに日本は大きく変わった。日本しかし心の中ではまだまだ古い人のようなものが多く人の中に残っています。坂本龍馬は何故今の世の中にこそ生まれてこなかったのでしょう。貴方のしたことに感動する人はたくさんいます。でも貴方のような人は一人もいない。龍馬さん、なぜ平成の時代にこそ居ないのだろう。そう思うとやっぱり貴方のことがまだちょっと（ちょっとだけです！）好きにはなれない。今の時代にこそ必要なのにねぇ。
（4月26日　高知　S・O　45歳　女性）

龍馬に魅了されて約3年、自分のやりたい事をようやく見つけました。私は42歳ですが、看護師になる事を決めました。看護学校受験の試験勉強中も、傍らに龍馬の本を置き、気がゆるむと本に手を当て心を奮い立たせていました。お陰様で合格し、4月より看護学生となり日々奮闘しています。必ず看護師になります。龍馬見守っていてくださいね。
（4月27日　愛知　M・N　42歳　女性）

龍馬さんの意志を受け継いだ男！岩崎弥太郎氏が創業：築いた三菱で働いています。龍馬さんが目指した世界の海援隊だと思っています。一生懸命定年まで勤めますのであの世へ行ったら、是非とも海援隊の隊員にしていただき、世界の海援隊を築く一助とさせてください！私の誇りは龍馬さんが生まれたこの国、日本で生まれ人生を歩めていることです！
（5月1日　滋賀　Y・M　51歳　男性）

中学生の頃「おーい竜馬」を見て龍馬の魅力にとりつかれました。当時私は転校生で勉強もからっきしの私に勇気をくれたのはあなたでした。幼少期のあなたと私がリンクして、こんな私でもやりかたがあるのかもと思いました。今では小四小三の二児のママです。これからも世界を見守っていてください。
（5月3日　無記名）

私の夫はあなたのファンです。学生の頃からずっと好きで好きで…。高校生の頃亡くなった継父と「いつか男2人で桂浜に行こう」と約束していたそうです。その夢は果たせず、継父はなくなりそれから10年以上経ちました。結婚前からその話を聞いていた私は、いつか連れて行ってあげたい気持ちでいました。
福岡で生活は忙しく、やっとGW。10時間ドライブしてやっと夢の桂浜に来られました。いつもは娘優先なを一人黙々と読んでいて、私は娘と休憩しつつ書いています。夫の夢をこれからも支え、かなえさせられる妻でありたいと、あなたに書きます。
（5月4日　福岡　S・U　33歳　女性）

久しぶりに来ました。今回は龍馬の新しい手紙が発見され、この記念館に寄託されたということで、学芸員の解説を聞きました。その他の手紙等についても、聞けば聞くほど龍馬という人の人間像の素晴らしさを感じずにはいられません。面白くて、真面目で、豪快で…。そう考えれば考えるほど日本という国はおしい人を失くしたものだと思います。せめて50才ぐらいまでは生きていほしかったと心から思います。歩んでほしかったと心から思いました。また来ます。
（5月14日　高知　H・M　60歳　女性）

＊＊＊編集者より＊＊＊

新発見の龍馬書簡の公開もありGWは多くの方で賑わいました。この手紙は歴史的に大変重要な手紙なのですが、龍馬の人柄を最もよく表すのは乙女姉さん宛の手紙です。政治の事から恋愛の話まで包み隠さず詳細に書き綴っていて、龍馬の魅力があふれ出ています。考えてみるとこの「拝啓龍馬殿」も仕事や恋愛、家庭内のことなどプライベートな内容が多いです。龍馬ファンの皆さんにとって龍馬は良き相談相手なのですね。

尾﨑　由紀

「新企画にはすぐ反応が！」

H25年度記念館のアンケートより

平成25年度の「記念館入館者アンケート」は総入館者数158、780人中、3、598人の方からご回答、ご協力いただきました。皆様からの貴重なご感想・ご意見・ご希望は、記念館を運営していく上でのヒントとなり、大いに参考になっています。

内容は様々ですが、記念館の新しい試みや企画に対しての反応を、すぐに返して頂けるのは有難いことです。例えば、記念館には〝龍馬の文字で自分の名刺を作ろう〟というコーナーがあり、皆さんが名刺作りを楽しまれている様子がよく伝わってきます。

また、最近は何といっても〝新発見の手紙〟についてです。「わざわざ県外からこの手紙を見に来ました」「今回のような新発見には心躍ります」などなど。

反面、「展示の仕方に工夫と改善を」や館内の設備についてのご希望などもあり、より良い坂本龍馬記念館を目指したいものです。

このアンケートの特徴である「幕末のお気に入りの人物は？」という項目に、今年から「その人物を選んだ理由は？」という項目を増やしました。「理由」には興味深いものが沢山あります。館の〝海の見える・ぎゃらりい〟では「幕末の志士人気ベスト10」展を適時開催しており、今年は〝人気ベスト10〟過去5年間の集大成を7月1日から開催しています。その展示の中に、〝その人物を選んだ理由〟も展示してありますので是非ご覧になって見てください。

最後にアンケートを1つご紹介します。「非常に良い旅になった。また龍馬本人と話してみたい」（男性・21歳・兵庫県）

中村　昌代

●新職員紹介●

4月より坂本龍馬記念館に勤務となり、龍馬や館について日々学ぶ中、知れば知る程に龍馬や幕末の人物に魅力を感じます。お客様からの質問にもお答え出来るよう努めます。よろしくお願いいたします。

田中　智子

4月1日より坂本龍馬記念館に勤務しております。経理・総務を担当しております。皆様に龍馬記念館を満喫していただけるよう頑張ります。よろしくお願いいたします。

濱田　愛華

私の息子は龍馬さんのように生きたいと青雲の志を
（3月29日　神奈川　K・K　76歳　男性）

もっと長崎の中学へ進みました。しかし月日が過ぎ、そんな想いは薄れくじけかけていましたので、今回機会があって龍馬さんの育った高知に来て、初心を思い出せればと期待しています。あなたのように歴史に名を残すことは出来なくても、自分の信じた道をゆくたくましい男になって母のところへ戻ってきてくれるよう望みます。本当に土佐の海は大志を抱かずにはいられない素晴らしい海ですね。桜も満開です。
（4月1日　福岡　Y・E　43歳　女性）

私の父は先の大戦で昭和19年10月10日に32才で南支那海方面で戦死しました。貴殿もこの国の行末に想いを馳せながら意にそわないまま若い貴い生命を絶たれたと思います。さぞかし無念なことだったと思います。省みて私は両者の年令をはるかに超えて74才になりました。一時期は行政マンとして地域に貢献してきたつもりですが、遠く及ばない気がします。残された人生を世のために尽し一生を終えたいと思っております。
（4月13日　島根　Y・K　74歳　男性）

9年前に天に召された主人の残した「竜馬がゆく」を読んで、遅まきながらすっかりハマってしまいました。主人と13年前に訪れたときはまるで無関心に等しかったのですが、今日はじっくりと見ていただきました。先日東京で見つかった手紙は18日から展示との事、又近い内にと思っています。ところで、私の主人は天国で貴方様にお目にかかっているでしょうか。そんな楽しい想像をめぐらせている私です。13年前の写真は貴方と同じ様にふところに手を入れたステキな写真です。
（4月15日　大阪　Y・N　女性）

ここは館長の部屋

森　健志郎

ウイーンの警告

飛行時間が10時間を超えると年のせいもあるがさすがに堪える。先日、オーストリア・ウイーンで開かれた坂本龍馬にハプスブルク家主宰の「平和の炎賞」が贈られた、授賞式へ向かう道中の話である。羽田からフランクフルト経由でおよそ14時間。日本から〝それでは〟と龍馬ファンの皆さん16人もツアーで参加していただいた。名だたる音楽文化の国だからファンにはたまらぬ魅力の国、一度は訪ねたい思いはあれど、何せ遠い。今回は龍馬がその躊躇の思いにけりをつけてくれたわけだ。

羽田を発ったのが午前9時頃であった。旅の興奮の雑談が一区切りつくと早速時間を持て余す。機内を散歩するわけにもゆかない。通路で、軽く体操してみる。そしてやっぱりテレビを点ける。ハリウッドものを到着までに3本観ていた。私の斜め前方のTさんなど「5本観ましたねえ」とレシーバーをつけたままの余裕であった。食事は2回出た。ゆっくり食べた。第一食欲があまりないのだ。持ち込んだ文庫本もそう読書の気持ちがわいてこない。で、目をつむる。ところが不思議と眠れない。

「間もなくフランクフルトです。20分ほどで着陸態勢に入ります。シートベルトを！」突然のこの挨拶に救われた。その後ウイーンまで1時間半の乗継なんか苦にもならなかった。

ウイーン空港には、日本人ガイドさんが迎えに来てくれた。正直ほっとしたのだが、ホテル行きのバスに乗って着席するなりのあいさつに驚かされる。当然「音楽の都へようこそ」から始まると想像していたが外れた。「言いたくはないのですが、ドロボーに気を付けてください。貴重品は絶対体から離さぬように。どんな場所でもです！」。オーバーじゃないのと思ったのだが。口酸っぱく「気を付けて！」を連発するガイドさんになんか気の毒な気にさえなったものである。

授賞式は滞りなく終わった。今、ウイーンの空気をたっぷり満喫した気がする。目を閉じれば、芸術的石壁の上に翻る、龍馬の「海援隊」と同じ赤白赤の国旗が懐かしい。知り合った人々の顔も。

しかし、最後に一つだけ。実はメンバーの一人が列車の中で座席の上の荷物台に置いたリュックの中から、パスポートを盗まれた。ガイドさんの警告が当ったのだ。被害にあったOさん「狙われた。けんど、見事ぜよ」と苦笑いであった。

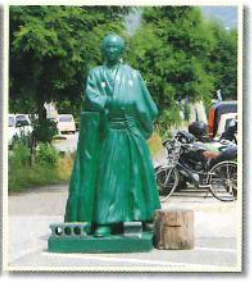
海の見える・ぎゃらりい

■8月の展覧会告知「“ワシも龍馬ぜよ！”写真」展

撮影：島崎順也

男前龍馬

龍馬ポスト


ヤ・シィパークの龍馬

8月の展覧会は、“海の見える・ぎゃらりい”初登場、“高知の面白いページ”管理人・島崎順也さんの写真展です。県内に点在している色々な龍馬像が一堂にぎゃらりいへ集合します。

島崎さん曰く、「坂本龍馬はやっぱり一番人気がある人物です。それが証拠にあちこちに“俺も龍馬ぞー(像)、俺も龍馬ぜよ”とこじゃんと居ります。写真に撮って行くうち、ほとんどそれぞれ顔も表情も違うことに気づいたことです。と言うことは、作者も違うということになります。作られた材質もプラスティックが多いですけんど、銅・大理石・石、中にはサンゴも金属もあり、大きいのは4m、色も黒・緑・白・灰色・金色など多種多様で、お土産物に至ってはあんまり多すぎてちょっとわからん状態です。写真を見られて、あっ！これは、あそこにあったと気づかれると思います。」と皆様もぜひ写真をご覧になって、様々な龍馬像を楽しんで見てください。そして、「あそこにはこんな龍馬も居たよ！」とお知らせくださいね。

中村　昌代

■夏休みこども教室「もんきりうちわを作ろう」

夏休み、色紙を切り抜いた「紋」を貼って、粋なうちわを作ってみませんか。

「紋きりあそび」は江戸時代から庶民に広まり伝わってきた遊び。紙を折りたたみ、「紋きり型」に合わせて切った紙をそっとそっと開いてみると・・・現れるのは江戸の昔から伝わる美しい紋の形。どんな形ができるのか、わくわくしながら次々といろんな型を切ってみたくなる、お子さんばかりか大人も思わず夢中になる楽しさです。

毎年人気のもんきりうちわ教室。お子さんたちは楽しそうに制作に励み、センス良く仕上がったマイうちわに笑顔も満足気。さて、今年のもんきりうちわは？

夏祭りにはオリジナルうちわを持って出かけよう！

日時　8月2日(土) 午前9：30～11：30　　**定員**　小・中学生20名(小学生は保護者同伴)

会場　国民宿舎桂浜荘（龍馬記念館東隣）

申込　7月22日(火)から電話申込(先着順)※詳細はＨＰ等をご覧になるか、記念館までお問い合わせください。

手島　ゆか

■盛り上がった桂浜のパブリックビューイング　逆転負けにため息

桂浜に4300人を集めたパブリックビューイング

ワールドカップ日本初戦の6月15日、桂浜でパブリックビューイングのイベントが5000人近いサッカーファンを集めて開かれた。残念な結果となったが、桂浜が久しぶりに盛り上がった。館でもその日に合わせて館前に立つ“シェイクハンド龍馬さん”に全日本のユニホームを着てもらった。

梅雨のさなかである。雨もあってパブリックビューイングには心配の声もあった。5000人を目標にハードルの高さを思ったが、サッカー熱の高まりの上に、当日晴れという天気予報が人気を煽った。高知市内からバスのピストン運転でお客さんを運んだ。朝6時から運転開始。浜には7時ごろからユニホームのファンが増え始め、10時のキックオフを待ちかねた。そして、始まった試合での先制ゴール。桂浜がまさに歓声に揺らいだ。残念ながらさいごは逆転の結果に一転ため息が漏れたが、次の試合の必勝を胸に桂浜を後にした。

シェイクハンド龍馬さんも、心なしか寂しげであった。

森　健志郎

入館状況

2014年6月20日現在（開館以来8,210日）

◆総入館者数		3,549,415人
◆最多入館	(2010年5月2日)	6,686人
◆最少入館	(2004年10月20日、台風のため)	8人
◆2014年度最多入館	(2014年5月4日)	2,668人
◆2014年度最少入館	(2014年6月12日)	136人

編集後記

NHKの街頭番組がきっかけで起きた龍馬の新発見の手紙の初公開、そして示野由佳さん主役のオペラリサイタルを県民文化ホールでと、忙しい4月に続いて5月は、オペラリサイタルが舞台はオーストリア・ウイーンへと移った。龍馬がハプスブルク家から「平和の炎賞」を授与されることになったのだ。そして、一年一回の「現代龍馬学会」総会と研究発表会、館にとっては重要事項ばかり。さらにハード面では館のリニューアル構想が動いている。で、原稿は山の如し、いずれもトップニュースである。このテンポがさらにアップする。影響を受けて原稿の出が遅くなった。編集後記もご覧のとおり、初めて締め切り後となった。　(モ)

館だより“飛　騰”第90号（年4回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏
発行日　2014(平成26)年7月1日
発　行　高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL (088)841-0001　FAX (088)841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間　9:00～17:00　年中無休
入 館 料　一般500円・高校生以下無料
身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名
高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、92円切手5枚をお送りください

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

第６回現代龍馬学会総会・研究発表会
～６年目 学会の在り方について～

会長 片岡 雅文

県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は２００９年の発足から数えて６年目に入り、ことしも高知市浦戸の桂浜荘で、総会と研究発表会を開きました。

外へ向け、鮮明で活発な学会へ

総会では理事のお一人から、学会の在り方について厳しい指摘がありました。

「学会の活動が停滞しているように見える。会員が増えないし、研究発表会への参加者も少ない。単なる歴史愛好家の趣味の会になっているのではないか？　もっと会員の数を増やし、外へ向けて発信していくような学会にしていかねばならない」

確かにご意見の通りで、いまのままでいいはずがない。会員の裾野を広げ、活動をいっそう鮮明で活発なものにし、学会の存在を多くの人たちに知ってもらえるようにしたい。肝に銘じて、これからも努めていきたいと思います。

ひきつづいて開かれた研究発表会は、県内外から１０２人の参加があり、例年に増して熱のこもったものとなりました。毎年、何人かの方がはるばる高知まで足を運んでくださいますが、ことしも基調講演の長宗我部友親さんが東京、研究発表の網屋喜行さんが鹿児島、加藤貴行さんが長崎、神谷良昌さんが沖縄と、４人が遠方から来てくださいました。その講演も研究発表も、地元高知の研究者と合わせて、独自の知見と思索に根ざしたもので、聴講者は多くのことを教わりました。龍馬と幕末維新に時代について、地道な研究を重ねている方々が全国にいて、高知に愛着を持ってくださっている。これはありがたいことです。

参加者から熱心な質問相次ぐ

龍馬に学ぶ新しいヴィジョンと哲学

ことしのテーマは「変革のとき」でした。断るまでもなく、龍馬が生きた幕末維新期と私たちが生きている平成の現代とを重ね合わせ、イメージしたものです。

むろん、変革を必要としない時代はありはしませんが、現代ほど国家や社会の在り方、私たち一人一人の生き方が問われている時代はないでしょう。

世界史の視点で見れば、冷戦終結につづくアメリカ独り勝ちの時代が終わり、国家間の新たな対立をはらんだ不安と混沌の時代に入っています。そのなかで私たちは、２０１１年の東日本大震災によってそれまでの国家観、文明観を揺さぶられ（特に原子力に依存した文明構造の見なおし）、新しいヴィジョンと哲学を必要としています。

それは１５０年前、龍馬が姉乙女に宛てて書いた手紙の有名な言葉、「日本を今一度せんたく（洗濯）いたし申候事」にほかなりません。そしてそこに、私たちが龍馬の思想と行動に学ぶ意義があるように思われます。

迫力満点の“長宗我部火縄銃鉄砲隊”の実演＝八策の広場で

宣言

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は、二〇〇九年四月の発足から五年を経て、県内外から一〇二人が参加して第六回研究発表会を開いた。

テーマは「変革のとき」。三年前に起こった東日本大震災と福島原発事故によって、私たちの生き方が根本から問われている今、幕末維新という変革の時代を生きた龍馬の思想と行動に学ぼうとしたものだ。

長宗我部家十七代当主・長宗我部友親さんの基調講演を挟んで、地元高知と長崎、鹿児島、沖縄からの参加者も加わり、興味深い研究発表が行われた。それぞれ日頃の地道な研鑽がうかがわれ、私たちは多くを学び、心に残るものとなった。

三年後の龍馬暗殺百五十年の年に向けて、龍馬記念館の新館構想も進んでいる。龍馬の人と時代に学びながら、将来へ向けてこの国のあり方を考えていきたい。

平成二十六年五月十七日
高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

第6回龍馬学会総会・研究発表会
様々な角度より「変革のとき」を学ぶ

会場風景

テーマ『変革のとき』

第6回目となった現代龍馬学会は、5月17日に国民宿舎・桂浜荘にて総会と研究発表会が行われた。今年は、長宗我部家17代目当主・長宗我部友親氏を基調講演の講師としてお迎えし、6名の報告者が、様々な角度から龍馬や幕末維新期について充実した研究発表を行った。

また、昼の休憩時間を利用して、長宗我部火縄銃鉄砲隊による実演があり、大変見応えがあった。

三浦 夏樹

来賓挨拶

高知県教育長
田村 壮児 氏

今、日本は東日本大震災や原発事故、憲法問題、グローバル化に伴うTPP問題や領土問題など、国内外に様々な問題を抱えており、まさに変革の時を迎えている。こういう時だからこそ、龍馬の先見性や広い視野、柔軟な考え方、懐の深さ、人に対する優しさや愛情に学ばなければならない。

高知市教育長
松原 和廣 氏

龍馬は教育にとっても大事な人物で、龍馬の生き方そのものが教材になる。今、教育は志の時代と言われ、子どもたちの夢や希望をどのように学校が培っていけるかが、教育の大きな課題である。こうした状況の中で、様々な角度から研究発表を行う龍馬学会は、高知県や高知市にとって宝になると期待している。

❶ 網谷 喜行 氏

鹿児島国際大学客員教授
吉田孝継子孫

「明治維新の変革と「吉田東洋」一族の生き方 ―「本家」の孝継と「分家」の正春の場合―」

土佐藩政史に欠かせない人物

土佐の幕末で有名な吉田東洋の家は分家で、吉田孝継が吉田本家の当主であった。平安時代からの吉田家の成り立ちや、山内家に召し抱えられる頃の説明の後、幕末から明治以後のそれぞれの吉田家について考察された。特に、東洋の長男・正春が、新政府への出仕と自由民権活動という相反する活動に尽力する心の動きは興味深かった。

現在網谷氏は、吉田家の歴史をまとめられている。吉田東洋は幕末の土佐藩政史に欠かせない人物であるため、その成果を大いに期待したい。

❷ 加藤 貴行 氏

『花月史』著者
長崎龍馬会主任講師

「幕末維新期の長崎について」

人々の記録を

幕末維新期の長崎については、あまり研究が進んでおらず、当時長崎に在留していた人物の日記があるが、検証されていないそうだ。そこで、これらの人々の記録について、他の資料で裏付けを取りながら幕末維新期の長崎の考察を行われた。

幕末の長崎で起こった事件や、戊辰戦争時の土佐藩及び海援隊による長崎鎮定の模様などについて、信頼性の低い資料も別の資料で裏付けを取ることで使える資料であることを証明された。

また、幕末期の海援隊士の遊女屋での様子など、興味深い資料の紹介もあった。

❸ 神谷 良昌 氏

沖縄ジョン万次郎会会員

「琉球に上陸したジョン万次郎」

万次郎と琉球を考える

現在、ジョン万次郎が最初に沖縄のどこに上陸したかは判明しておらず、『漂流人申口聞書』や久米島の資料『球陽』などを使って最初の上陸地について推察を行われた。また、地元の人ならではの潮の流れや釣り人の話などを織り交ぜた興味深い考察もされていた。

そして、琉球上陸後の万次郎らの動きも、『豊見城村史』の記述などから解き明かされていた。イギリス人ベッテルハイムや、聞き取りをした牧志朝忠との関係など、大変興味深い報告だった。

沖縄の子どもたちへの万次郎学習の支援もされているようで、充実した活動の様子が窺えた。

❹ 植田 英 氏

現代龍馬学会会員

「龍馬のもう一人のお祖父ちゃんの墓所」

筆山の山本家墓所

現在、父方の墓所である筆山の山本家墓所を訪れる人は少ない。植田氏がこの墓所を知ったきっかけは、山田一郎氏の著書で、それ以来毎年春と秋に墓所の清掃などをしてくださっているそうだ。

こうして関わっている中で、桑津姓の墓石が含まれていることに気付かれた。桑津家と山本家の関係については、先行研究を引用しながら、織田信長の家臣・鈴木三郎重家まで遡ることを紹介された。

また、沢辺琢磨や山本家・坂本家・武市家の複雑な関係についても紹介があった。

❺ 渡辺 瑠海 氏

エッセイスト
現代龍馬学会理事

「坂本乙女・はちきんの武士道」

良い人に、たくさん出会いなさい

龍馬を育てた姉・乙女について様々な言い伝えや資料を基に解き明かされた。乙女は様々な武芸に長じ、騎馬弓術水泳等何れもその奥義を究め、経書を講じ和歌を詠み、三味線・一絃琴はもとより舞踊に謡曲など非常に多趣味な女性だった。

乙女の娘と考えられる岡上菊栄は、乙女の言葉として「人生は、どんな人と交わるかで、大きく違ってゆくもの。だから、良い人に、たくさん出会いなさい。」と語っていたそうだ。この教えは、乙女から龍馬にも送られたはずで、現代の人たちにも金言となる言葉だと思う。

❻ 三浦 夏樹 氏

坂本龍馬記念館
主任学芸員

「坂本龍馬の倒幕論についての一考察」

龍馬の思想を探る

龍馬の倒幕論については、武力倒幕・平和倒幕いずれを想定していたものなのか研究者の間でも明確になっていない。資料が少なく、明確な答えは導き出せないだろうが、3年後の大政奉還150年に向けて、現存する資料から龍馬の倒幕論を考察した。

先日発見された龍馬の手紙の前半は、まさに大政奉還に関わるものなので、この手紙の紹介も兼ねて、まず前半部分の読み解きを行った。その後、大久保一翁の手紙などから龍馬の思想を探った。

基調講演

「坂本龍馬と長宗我部元親」

長宗我部 友親 氏

長宗我部家17代当主

長宗我部家の血筋は、大坂夏の陣の後、盛親一族が処罰されたため本流は途絶えた。その大坂の陣で盛親に従った者の中に、元親の末弟・親房の家系の者で、五郎左衛門がいた。

この五郎左衛門が土佐へ帰り、身分を明かした上で山内家に仕えた。五郎左衛門は島姓を名乗り、その子孫も幕末頃まで長宗我部を名乗ることができず、厳しく長い忍従の道をたどったそうだ。

友親氏は、この五郎左衛門の子孫であり、2010年に『長宗我部』という大変興味深い本を執筆された方である。

幕末の島家当主は与助で、その次男に浪馬がいた。この2人は龍馬の池内蔵太家族宛ての手紙に登場しており、交流は深かったと考えられるそうだ。

友親氏は、龍馬一番の仕事を大政奉還と考えておられた。慶喜は大政奉還にあたり、新政府が薩長に支配されることを恐れていたが、その懸念を払拭させたのが、船中八策第2条の「万機宜しく公議に決すべき事」だったのではないかと考えられていた。

龍馬のこの発想は、元親が廓中で講義をさせて育ててきた土佐南学に通じるそうだ。長宗我部家には南学を取り入れた兵法があり、家訓として「鞘の中で決せよ」つまり、刀を抜いたらそれは意味がない、政策で物事を決めていく、という言葉だそうだ。それを龍馬も受け継いでいたのではないだろうか、と推察された。

現代をみると、国の財政は破綻の域に入っており、人口も減り続けている。今後は医療や福祉に国家予算を大きく使わなければならないが、現在は民主主義であり、民主主義は個人の欲望が優先される。それゆえに、長期的な計画を立て遂行するという我慢の政治ができにくい。今こそ龍馬のように腹を決めて、自分の身を挺して政策を決めて新しい良い時代を造る、そういう変革を前向きに行っていくことが大事だと思う。第2の坂本龍馬が土佐から現れることを願う、という期待の言葉で話を終えられた。

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（十八）―

「御用捨無之方」

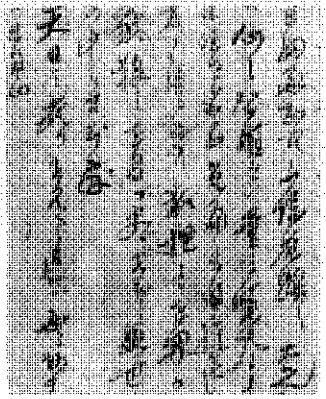
宮川　禎一

龍馬の人柄を知るひとつの方法は同時代人が彼をどう評したのかを読むことだ。

桂小五郎が龍馬にあてて薩長盟約の裏書の礼と寺田屋での負傷を見舞う内容の手紙が残っている。慶応二年二月二十二日の書状（京博蔵）だ。このなかで桂は龍馬のことを「大兄は心が公明で御量が寛大なのにまかせて『兎角御用捨無之方ニ御座候得共』（今は）狐や狸の世界か、山犬や狼のうろつく世間かといった不穏な世の中ですので、少しは光が見えるようになるまでは必ず必ず何事もご用心下さい」と書いている。

筆者はこの『御用捨之無き方』という表現に引っかかっているのだ。拙著『全書簡現代語訳 坂本龍馬からの手紙』では「用捨」を「用心」と訳した。「とにかく用心というものをお持ちでない方なので」という意味かと思っていたのだ。用捨＝容赦では「容赦の無い方」すなわち許容の無い、情け無用の人のような語感に感じたからだ。しかしながら桂の手紙では「用捨」と「用心」とは使い分けられている。改めて「用捨」を辞書で調べると「①用いることと捨てること。取捨。転じて善悪などの判断を下すこと。②ひかえめにすること。遠慮すること」さらには転じて「手加減」へ続くようだ。

桂が龍馬を「御用捨之無き方」と評した意味は②の「遠慮やひかえめの無い人」という意味かと思われる。文脈は「公明・寛大」（＋）に対して「用捨がない」（－）が置かれている。桂は寺田屋での事件を知って「龍馬の極端すぎるほどの隔意の無い性質」をマイナスに評価したのであろう。「用心のない方」という訳では意味が狭かったようだ。「自分の命への遠慮までが無い方」という意味だろう。万事きわめて用心深い桂小五郎らしい龍馬評である。



「桂小五郎書簡　慶応二年二月二十二日付
坂本龍馬あて（部分）京都国立博物館蔵（重文）」

コラム・龍馬のこと

「徒然なるままに、御手洗にて思う」

現代龍馬学会副会長　坂本　世津夫

「龍馬のこと」などまるで知らない私が、現代龍馬学会の副会長をやっている。これで良いのかとも思うが、単に姓が坂本で、坂本龍馬のご先祖がいた才谷が我が家のすぐ近くだったから、こうなったのだろう。432年遡って本能寺の変の頃は、我が坂本家の先祖もクロスする部分があるのではないかと思い、実は坂本龍馬ではなく明智光秀や長宗我部元親のことを少しだけ調べている。そんな中、3月に広島県呉市豊町大長にある豊公民館の豊老人大学事務局から坂本龍馬に関する話をして欲しいという依頼が届いた。何も考えずに演題を「明智光秀と龍馬」としてしまった。「時は今　天が下しる　五月かな」、これは天正10年（1582年）5月に明智光秀が「本能寺の変」の直前に詠んだ百韻連歌の発句（第1句目の歌）である。それから432年が過ぎた今、明治維新と同様に再び日本は「変革のとき」を迎えている。この時代の流れを、明智光秀と坂本龍馬という軸から考えてみたいという内容だった。しかし、話を詰めていくうちに実は大長と隣接する御手洗は長州と芸州による御手洗条約が締結された頃、よく密談の場所として使われていたということである。そして龍馬も立ち寄っているはずだということである。しかし、確固たる証拠がない。秘密会議の場所ならば、宿帳に名前を書いたり、ここに居たという証拠は多分残さないだろう。学会とか歴史は、証拠がなければなりたたないものである。現代龍馬学会の原点もそこにある。反面、想像は重要である。トロイ遺跡を発見したシュリーマンの時代にはインターネットという手段はなかったが、今では大いに活用できる。各地から発信されている情報に耳を傾けることも重要ではないか。そして状況証拠を積み重ねることも重要ではないかと考えている。そうは言っても、やはり重要なことは、正しい仮説を立てて、地域に足を運んで実証していくことである。そして、現在としては証拠を残していく作業が必要である。それは、論文であったり、日記であったり。

“話してみるかよ”

「思いがけない出会い」

現代龍馬学会理事 記念館学芸主任　前田　由紀枝

5月、ウィーンでの「平和の炎賞」授賞式。会場は、120人の参加者で心地よくざわめいていた。ハプスブルクさんたちウィーンの人だけでなく、日本大使館員はじめ現地の日本人も多くいた。

宴も終わりかけのころ、私は近くで“龍馬記念館”“国沢新九郎”という言葉が繰り返されていることに気づいた。

ふと、通訳を務めてくださった近藤愛弓（あゆみ）さんと目が合った。彼女ははにかんだように「実は、私の曽祖父が国沢新九郎なんです」と言った。

話を聞くと、新九郎の弟・新兵衛、直系の曾孫さんだという。「父は新兵衛の孫。新兵衛は満鉄会長から日本通運初代社長を務め、新九郎の遺児の面倒も見ました。私の祖母、つまり父の母が新兵衛の娘なのです。父は大伯父・新九郎のことをよく調べています」。

私はびっくりした。30歳という若さで亡くなった新九郎のご子孫が、ウィーンにいたのである。高知から飛行機を乗り継いで、19時間。ほぼ一日がかりのフライトだった。こんな異国に、幕末土佐人のご子孫がいるとは、夢のようだ。

国沢新九郎（1847～77）は、高知市越前町の人で、龍馬が「船中八策」を起草したといわれる土佐藩船・夕顔の艦長も務めた。維新後、高知藩留学生としてロンドン留学。修学目的を法律から洋画に転じて、帰国後に画塾『彰技堂』を起こした、日本洋画界草分けの人である。龍馬記念館には新九郎の描いた龍馬の油彩肖像画もある。

愛弓さんは父・常恭（つねやす）さんを、私に紹介してくださった。父娘二人はよく似た面立ちで、新九郎の肖像画にも顔が重なった。『パレットの影～或る先駆者の生涯』という常恭さんの書いた冊子もいただき、改めて新九郎に触れることができた。常恭さんも若くしてヨーロッパに渡り、ベルリンからウィーンでの暮らしが40年余りになるという。

私は改めて、龍馬の生家に近い大膳公園（高知市大膳町）にある、新九郎の生誕地碑を見に行きたいと思った。

高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
http://ryoma-kinenkan.jp